

ユーモアは最強の武器である

「ユーモアは最強の武器である」という本を読みました。ユーモアの優位性を紹介した本です。

人は笑うことによって脳内ホルモンが分泌され、気持ちが悪くなったり、ストレスが和らいだり、人への信頼感が高まったり、やる気が出たりします。しかもそれは相手に対してだけでなく、自分の行動にも表れてきます。

日本の組織の多くは「真面目であること」を大切にしています。もちろん真面目であることは大切です。ただ、その真面目さが人々を窮屈にしているのも確かです。この傾向は大企業や歴史ある企業に多く見られ、官公庁などはその典型と言われています。

■アップルやグーグル、ピクサー

アップルやグーグル、ピクサーなどは、ユーモアを大切にすることで大きく成長してきた企業と言われています。

世界初の全編CGアニメ「トイ・ストーリー」の大成功で一気に世界的なアニメ制作会社となったピクサーは、周囲を明るく元気にする陽気さと遊び心に満ちあふれた組織文化を持ちあわせていることで有名です。夜中に社内ミニゴルフ大会やスクーター競争を始めたり、ドレスダウン（普段着）の日を設け、その日は社員がコスプレ衣装を身にまといながら仕事をしたりします。それらは決して中途半端なものではなく、完成度の高い「本気の遊び」です。

だからと言って、ピクサーは生産性を

犠牲にしてはいません。むしろ、ピクサーは業界一勤勉で生産性の高い会社と言われています。「生産性の高いクリエイティブなチームを作るには陽気さと遊び心が不可欠である」という経営思想が実践されているのです。

■ユーモアあふれる組織

「本来、日本人はユーモアのある楽しい民族であり、幕末から明治初期にかけての日本人は好奇心旺盛でひっきりなしに笑い転げていた」と言われています。

いまの日本の多くの組織が堅苦しいのは、「長く存在しつづける組織はヒエラルキー構造が固まり硬直化してしまう」という特性に囚われてしまっているのも原因の一つだと思います。

もちろん仕事に対して真面目かつ真摯に向き合う姿勢は大切です。それは働くうえで絶対条件です。言いたいのは、真面目かつ真摯であることの先に、創造力豊かで、生産性の高い組織になるためにもっとできることがあるのではないかと考えてみます。

考えてみてください。多くの人たちが働きたいと思えるのは、間違いなく真面目な堅苦しい職場よりも、ユーモアがあり笑顔あふれる職場のほうがです。

■ユーモアとは違うけれど

私が市長になってすぐに感じたのは「市役所ってシーンとしているな」でした。最近も、ある若手職員から「シーンとした職場はストレスを感じます。来庁者も小声で話したりしています」と無音

の空間の息苦しさが伝えられました。

職員には職務専念義務があり、勤務中は職務に集中しなければなりません。職員がおしゃべりに終始し、来庁者への応対がおろそかになるなんてことは論外です。ただ、だからと言って一切の談笑が許されないというのは違うと思います。実際、私自身、シーンとした空間はいたたまれません。「潤滑油としての雑談」「リフレッシュのための談笑」はあるべきです。とは言え、なかなか談笑はしにくいでしょう。ならば、それに代わる簡単な方法を考えてみるのも一つです。

私は度々「庁舎内にBGMを流してみよう」と提案してきました。部門によってはすでに実践しています。昨年末、象潟庁舎1階で2週間のBGMトライアルが実施されました。来庁された方にアンケートを取ったところ、回答していただいた方全員が音楽が流れている方が良いと答えていました。職員もおおむねBGMを好意的に捉えているようでした。中には職場環境が変わることに違和感を覚える人もいるかもしれませんが、ですが、明るい雰囲気づくり、相談しやすい空間づくりに向けた何らかの取組みを検討することに意義はあると私は思います。



にかほ市長
市川雄次

創造を

想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。